

## 明るい人求む(見出し)

一方、東京の西部にある都市、八王子でも経済界がまとまり地元の芸者の集まりを、とりわけ、めぐみさんという芸者を支援するようになった。

めぐみさんは芸者の文化には何のつながりもない家に生まれた。しかし、仲居として働いていた料理屋で将来のお師匠さんになる方に出会い、芸者になる気はないかと彼女は誘われることになる。彼女が22歳の時であった。

「すべてが私にとっては新しいものでしたから、あるゆるものが素晴らしく感じられました」と、めぐみさんは言う、「そのような世界があるなんて思ってみたこともありませんでした。皆さんがわたしのめんどろをみて下さって、この世界へわたしを受け入れてくださいました。...ですから、わたしはとうとう自分の居場所を見つけたように感じたわけです。」

明治から昭和の初期の時代には、八王子では織物産業が盛んであった。そして市が栄えるとともに中町の花街も栄え、最盛期で二百人以上の芸者衆が活動していた。

しかし、第二次大戦後、女性は急激に着物を着ることはなくなり、洋服を着始めるようになる。

八王子の芸者人口は避けがたい減少の一途をたどり、1999年には現役の芸者衆はわずか10人になってしまっていた、と今年6月に風声舎から刊行された『芸者衆に花束を。八王子花柳界、復活』で、著者の浅原須美さんは書いている。

機屋と芸者の関係が非常に密接だったので、そのことによって八王子の花街の隆盛も直接影響を受けることになった、と浅原さんは彼女の著書で述べているが、この本には、どのようにして八王子花柳界が復活を果たしたのかが詳細に描かれている。その本はまた、浅原さんの10年間におよぶ八王子花柳界の取材の成果でもある。

めぐみさんは、30歳を越えても八王子の中町では最も若い芸者であった。

1999年に、彼女は新人を何人か見つける必要があると考え、志望者を募る広告を出した。

「着物が好きな明るい人、求む」とポスターには書かれていた。「年齢30くらいまで、経験不問、時給3千円以上、着物無料貸与、パート可。」

「世の中の女の子は、私と同じで、この世界のことは知らないだろうと思っていました」とめぐみさん、「正直言って、八王子の芸者の世界を再活性化するとか、そのようなことに乗り出したのではなかったのです。むしろ、私はただ同じ世代の他の女性に芸者について知ってもらいたかったし、同僚を見つけたかったのです、と言いますのは、周りの他の人は皆お師匠さんの年齢の人たちでしたから。」

彼女の動きと軌を一にするかのように、「八王子黒塀に親しむ会」(かつて栄えていた花街の黒塀の通りにちなんで名付けられた)が、1999年に芸者文化の保存伝承を目的として地元経済界の支援によって設立された、と現在の同会会長である福山眞吾氏は言っている。新潟の企業体のように、八王子でも経済界が市の芸者文化の衰退を懸念し、それについて一役買う決意をした。

地元の酒屋、つるやの主人である福山氏によれば、この支援団体には現在、女性を含め、約150の現役会員がいるという。

「率直に言って、会員にとって何かがあるわけではないのです」と福山氏、「我々は何かみかえりを得ようと思って活動しているではありません。我々はただ日本の伝統文化と、この地区でユニークなことをしようと献身してくれている芸者衆を応援したいだけなのです。」

めぐみさんは、2001年に自分自身の置屋をスタートさせた。八王子では20年振りのことであった。以来、所属していた3人の芸者が自分自身の置屋を持つことになったし、めぐみさんが最初に求人広告を出して18年後には八王子の芸者人口はほとんど倍増した。そして昨年には50年以上振りに、半玉のくるみさんがデビューした。

2014年には、めぐみさんは芸者を主演とする舞踊の公演である、「八王子踊り」を行い、八王子いちょうホールを満員にした。第2回八王子踊りは今年5月に行われた。

彼女の活動は、オーストラリアのカウラ、ハワイ、上海のような海外への八王子の芸者派遣を支援するまでになっている。彼女たちは、また、病院のロビーや小学校でも公演した。

めぐみさんはドイツ映画『フクシマ、モナムール』にも主演した。この作品は東北地方が地震と津波で甚大な被害を受けた2011年の東日本大震災後に彼女がとった行動に触発されて創作されたストーリーに基づいている。震災後、めぐみさんは全てを失ってしまった東北地方のある芸者に三味線をとどけたのだだった。

「文化の伝統を学ぶことは大切ですが、また時代とともに進化し続けることも大切なことです」とめぐみさんは言う。「変化を通して、この文化を持続させることができますと思います。」

浅原さんは、八王子の花柳界はある程度まで復活を遂げたが、現在もたらされている状況が将来も誰にとっても良いとは限らない、なぜなら現役の年長の芸者で伝統的なやり方を好む人が多くなれば、更に変化していくことはむずかしくなるだろうから、と言う。「それぞれの花柳界が独自の芸者文化活性化策を考える必要があります」と浅原さん、「一度なくなってしまうと文化を再創造するのはむずかしいと思います、ですから、次の世代に手渡すために、文化がまだ存在しているうちに、何かをすることが大切です。」

#### 「浅原さんの、言葉やマナーのヒント」

- 芸者とは、踊りと三味線の演奏を含む、日本の伝統芸能の修練を積んだ、客をもてなす女性の芸能者（「エンタテイナー」）で、時に芸妓あるいは芸子と呼ばれる。
- 舞妓は見習中の芸者で、この言葉は主に京都とその周辺で使われる。東京では半玉という。
- 花柳界、花街は両方とも全国的に芸者の地区を言う言葉。（両方との漢字の花で始まっている。）
- 彼女たちに声をかける時には、例えば、「めぐみーさん」、というように彼女たちの芸者名で呼ぶか、「おねえさん」（目上、年上の女性の意味）と呼ぶ。たとえ、百歳であったとしても決して「おばさん」あるいは「おばあさん」と呼んではならない。（これらは、中年の婦人、老婦人を意味する。）
- ソックスまたはストッキングの着用を忘れないこと。畳の上に素足で上がらない。
- 服装についてはビジネスで認められるカジュアル・スタイルか、それ以上にフォーマルで。
- 芸者さんにお酒をすすめるのを忘れないように。